

聖徳記念絵画館についての一考察

塩 田 昌 弘

A Study of Meiji Memorial Picture Gallery

SHIOTA Masahiro

〔目次〕

序章

I. 明治神宮生成の由来

II. 聖徳記念絵画館の壁画の画題選定と建築との関係

（イ）小林正紹について

（ロ）図面等

III. 聖徳記念絵画館の壁画（画題）の解題について

終章

図版

注と参考文献

序章

降る雪や明治は遠くなり¹⁾にけり

明治45年（1912年）、7月30日、明治天皇が崩御された。この聖天子の業績を後世に伝えるために、大正15年（1926年）、10月、明治神宮外苑に聖徳記念絵画館が開設された。

館内には、当時の一流の画家たちによって描かれた明治天皇と昭憲皇太后の御事績が、壁画に表現され、展示されている。この歴史画を観る者は、誰でも、聖天子と当時の国民

とが尊敬され、且つ、敬慕した、真摯な熱い心情が時を越えて伝わるのを禁じえない。こういった、聖徳記念絵画館が、一体どのような経緯で生成されていったのか、そして、現代に何を問いかけるものか、という問題を本論考で明らかにしようと思う。

I. 明治神宮生成の由来

明治45年（1912年）、7月30日、明治天皇が崩御された。天皇を追慕し、東京に御陵が造営されるよう国に請願する有志がいた。その有志とは、渋沢栄一（1840～1931、子爵）、阪谷芳郎（東京市長、男爵）、中野武宮（東京商業会議所会頭）を代表者とする人々であった。しかし、政府ならびに宮内省は、下記の理由で、東京には御陵墓はつくらない方針を打ち出していた。

東京市民ノ情意ヲ諒トセラレ深ク御同情アリタレドモ如何セン御陵墓ノ場所ハ天皇御在世中既ニ御内定アリ伏見桃山ヲ宮内省ニ於テハ神地トシテ御取り置アリタル趣キヲ承リ又 天皇ニハ桓武天皇以來多年ノ帝都タリシ京都ヲ後ニシテ時勢ノ變化止ムヲ得ズトハ申シナガラ東京ニ遷都アラセラレタルコトニ付京都地方ノ土地人民ニ對シテ深ク懷舊ノ念ヲ有セサセラレ死後ハ舊都附近ニ埋骨アラセラレ度深キ思召モアリタルニアラザルカト拜察シ奉ル²⁾（中略）

有志たちは委員会をつくり、種々に検討を重ね、御陵墓に代るべき何か精神的な或るもの、即ち、神宮を東京に造営しようではないかとの結論に達したのであった。そして、大正2年（1913年）、12月20日、勅令308号により神社奉祀調査会を設置し、これに伴う種々の問題点を吟味し、解決していくことにした。そして、代々木の場所に神宮を建てる事が決定されたのである。それは次の理由からであった。

此ノ代々木ノ土地ハ穩田ノ御料地ト申シ慶長ノ昔加藤清正ノ下屋敷ニシテ其ノ一隅ニ清正ガ茶ノ湯ニ用ヒタリト稱スル古井戸アリ今モ清水滾々湧出致シテ居リマス、亦 天皇ニハ皇后ノ宮（昭憲皇太后）ノ體質御弱カリシコトヲ常ニ御懸念アラセラレ此ノ土地ニ朴素ナル庭園ヲ作ラセラレ皇后ノ宮ニ御遊歩ヲ御勸メアリシ所デアツテ其ノ庭園ノ設計ニハ 天皇自ラ鉛筆ヲ取ラセラレ圖ヲ御引相成リ種々侍從ヘ御下命アリシト承ル所謂石無シノ庭園ニテ一切石ヲ用ヒス池ニハ菖蒲ヲ幾百種植ヘサセラル（中略）土地ノ廣サハ約二十二萬坪ニシテ森林モアリ此ノ所ニ御本殿ヲ作り奉祀スルコトニ定マツタノデアリマス。³⁾

また、更に、大正5年（1916年）、6月、神社奉祀調査会は以下の事を決定した。

社格ハ官幣大社、社號ハ明治神宮ト申スコトニ決定⁴⁾

現在の明治神宮は、かくして生成され、発展していくのである。

Ⅱ. 聖徳記念絵画館の壁画の画題選定と建築との関係

聖徳記念絵画館は、明治天皇と昭憲皇太后の御在世中の御偉績を絵画（壁画）に表現し、社会の人々にその聖徳を伝える目的で建設された。そのため、その歴史的業績のどの場面を壁画に描けばよいのか、当初から、画題の場面選定に関係者は苦慮せざるを得なかった。これまで、明治神宮を代々木の地に建設し、国営となした有志たちは、更に、大正4年（1915年）、12月15日、明治神宮奉賛会を成立させた。大正6年（1917年）、5月、明治神宮奉賛会の働きで、画題選定に関する委員及特別顧問規定を設けた。この規定は下記のとおりで、委員諸氏を顧問ならびに絵画委員に依属し、画題の選定にあたらせたのである。

委員及特別顧問規定⁵⁾

- 一、會務中特別審査ノ必要アリト認ムル事項ハ委員ヲ置キ其審査ニ任ゼシム
- 二、委員會ノ議長ハ出席委員ノ推薦ニ依リ委員又ハ特別顧問中ノ一人之ニ當ル
- 三、理事ハ何時タリトモ委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得
但シ表決ノ數ニ與ラズ
- 四、特別ノ會務ニ付會長ノ諮詢ニ應ゼシムル爲メ特別顧問ヲ置クコトヲ得
- 五、委員及特別顧問ハ會長ノ推薦ニ依リ總裁之ヲ囑託ス

委員氏名（大正六年五月二十五日御裁可）

繪畫館顧問	子爵（後伯爵）	金子堅太郎
同 委員	子爵	藤波言忠
	文學博士	三上參次
		赤司鷹一郎
	侯爵	徳川頼倫
		正木直彦
	文學博士	萩野由之
	（後文學博士）	小牧昌業
		池邊義象
		中原邦平

その後、大正6年(1917年)、7月20日、維新史料編修事務局で、第1回委員会を開いた。以後、この種の会議でやりとりされた経緯は次のとおりであった。

繪畫館顧問子爵金子堅太郎及繪畫館委員子爵藤波言忠以下全委員の外、徳川明治神宮奉賛會々長、阪谷同會理事長出席せり。曩に畫題の選定を維新史料編纂會竝に臨時帝室編修局に依囑の際は 明治天皇の御事蹟のみに限定したりしが、既に 昭憲皇太后を合祀する今日に於ては、併せて其の御事蹟をも加ふべしとの阪谷理事長の意見に基き、之を採擇することに決し、金子顧問は議長となり、維新史料編纂會提出の畫題を原案として逐次審議に入り、爾來會合を重ねること十數回、稿を重ねること二回に及べり。其の主なるものは 昭憲皇太后の御事蹟追加と勸業事業の増補とにあり。内亂と目すべき戦争畫は成るべく之を避けたりしが、鳥羽伏見の戦、西南の役及熊本籠城の如きは、討論の結果、國運の發展に大關係あるを以て之を採用することに意見の一致を見、描寫方法の如きも獨り正面のみに限らず、側面をも併用する事、及畫題選定方針の大要を定めたり。斯くして大正七年一月、「御參内始」乃至「大葬」八十五題を得たり。⁶⁾

そして、その後、絵画委員長正木直彦の紹介で、洋画家五姓田芳柳(1827~1892)に画題の考證図の製作を委員会は依頼したのである。そして、出来上ってきた考證図を元に委員会は、更に検討を重ね、大正7年(1918年)、9月21日、下記の文書を第12回委員会に提出したのである。これは、重要な大方針の決定事項であった。五姓田芳柳の努力の跡がしのばれる。また、画題を決定したその当時の委員たちの国家事業に対する真摯な情熱が伝わってくる。

即ち第一に畫題の増加せること之れなり。其の初に於て五十題と定めたるは、繪畫館の内容上、適當と信じたりしが、維新史料案に依れば七十九題となり、實に委員會にては八十五題の多きを算したれば、館の内容との調和を計り、畫面を大小二種に分ち、大畫を十二尺幅として三十五枚、小畫を六尺幅として五十枚、其の大小は事件の輕重に依ること、せり。第二は畫題の説明なり。繪畫委員池邊義象専ら之を擔任して、各畫題毎に其の史實を挙げ、畫面に現はる、人物の年齢装等を附記すること、す。第三は畫題につきそれぞれ考證図を作製すること、し、藤波委員先達して五姓田芳柳實地に就いて之が描寫撮影すること、せり。之が爲めには小委員會を組織し、猶一層審査研究を重ねること、せり。此小委員會は之を臨時帝室編修局内に置き、畫題の説明に詳略二種を作ることに決し、二年餘の星霜と前後六十五回の小委員會々議を経て、大正十年一月二十八日、八十題を選出して其略解及考證圖と共に之を委員總會に委任し、小委員會は修補を加へて、同年八月繪畫館委員會議員子爵金子堅太郎は繪畫館委員會報告書を徳川會長に提出せり。斯くて翌十一年六月十日、徳川會長は之を總裁殿下に上申し、七月十五日、其の御裁可を得たり。

拜啓陳者明治神宮外苑内ニ於ケル聖徳記念絵画館ノ建築ト相應ジ館内ニ掲グベキ作畫事業ノ
 第一步トシテ本會繪畫館委員ニ於テハ壁畫々題ニ付數年ニ涉リ慎重審査ヲ遂ゲ今般漸ク撰定
 ヲ了リ候就而別紙寫ノ通り總裁宮殿下ニ上申御裁可ヲ仰ギ度存候間御熟閱ノ上賢慮御開示被
 下度畫題竝ニ解説考證圖ヲ附シ此段得貴意候 敬具

大正十一年五月十五日

明治神宮奉賛會々長公爵

德 川 家 達⁷⁾

これらの経緯により、現在、聖徳記念絵画館で展示されている壁画の画題（作品名）は、
 次の様に決定したのである。

(番号)	(画 題)	(場 所)	(年月日)
1	御降誕	京都中山邸内御産所	嘉永五年九月
2	御深會木	御三間（オミマ）	萬延元年閏三月
3	立親王宣下	陣屋	同 元年九月
4	踐祚	清凉殿小御所	慶應三年一月
5	大政奉還	二條城黒書院	同 三年十月
6	大政復古	小御所	同 三年十二月
7	伏見鳥羽戰	鳥羽伏見街道	明治元年一月
8	御元服	紫宸殿	同 元年一月
9	二條城太政官代行幸	二條城東門前	同 元年二月
10	大總督熾仁親王京都進發	建禮門前	同 元年二月
11	各國公使召見	紫宸殿	同 元年二月
12	五箇條御誓文	紫宸殿	同 元年三月
13	江戸開城談判	芝田町薩摩邸	同 元年三月
14	大阪行幸諸藩軍艦	天保山沖	同 元年三月
15	即位禮	紫宸殿	同 元年八月
16	農民収穫御覽	尾張熱田八丁畷	同 元年九月
17	東京御著輦		同 元年九月
18	皇后冊立	玄暉門内	同 元年十二月
19	神宮親謁	内宮	同 二年三月
20	廢藩置縣	皇城大廣間	同 四年七月
21	岩倉大使歐米派遣	横濱港	同 四年十一月
22	大嘗祭	吹上御苑	同 四年十一月

23	中國西國巡幸長崎御入港	長崎港	同 五年六月
24	中國西國巡幸鹿兒島著御	鹿兒島島津邸	同 五年六月
25	京濱鐵道開業式行幸	新橋驛	同 五年九月
26	琉球藩設置	那霸歸著	同 六年六月
27	習志野之原演習行幸		同 六年四月
28	富岡製絲場行啓	富岡	同 六年六月
29	御練兵	赤坂御苑内	同 七年
30	侍講進講	赤坂假皇居御座所	同 八年
31	徳川邸行幸	東京府小梅村	同 八年四月
32	皇后宮田植御覽	赤坂御苑	同 八年六月
33	地方官會議臨御	淺草本願寺書院	同 八年六月
34	女子師範學校行啓	御茶ノ水	同 八年十一月
35	奥羽巡幸馬匹御覽	盛岡八幡社内	同 九年七月
36	畝傍陵親謁	畝傍	同 十年二月
37	西南役熊本籠城	熊本	同 十年二月～四月
38	内國勸業博覽會行幸啓	東京	同 十年八月
39	能樂御覽	青山御所内	同 十一年七月
40	初雁ノ御歌	赤坂御所内	同 十一年九月
41	グラント將軍ト御對話	濱離宮中島御茶屋	同 十二年八月
42	北海道巡幸屯田兵御覽	石狩國山鼻村	同 十四年九月
43	山形秋田巡幸鑛山御覽	秋田縣院内	同 十四年九月
44	兌換制度御治定	赤坂假皇居御座所	同 十四年十月
45	軍人勅諭下賜	赤坂假皇居内太政官	同 十五年一月
46	條約改正會議	外務省	同 十五年四月
47	岩倉邸行幸	馬場先門内	同 十六年七月
48	華族女學校行啓	四谷尾張町	同 十八年十一月
49	東京慈惠醫院行啓	芝公園	同 二十年五月
50	樞密院憲法會議	赤坂假皇居會食所	同二十一年六月～十二月
51	憲法發布式	正殿	同 二十二年二月
52	憲法發布觀兵式行幸啓	櫻田門前	同 二十二年二月
53	歌御會始	鳳凰ノ間	同 二十三年一月
54	陸海軍大演習御統監	尾張國	同 二十三年一月
55	教育勅語下賜	表御座所	同 二十三年十月
56	帝國議會開院式臨御	貴族院	同 二十三年十一月

57	大婚二十五年祝典	正殿	同 二十七年三月
58	日清役平壤戦	平壤	同 二十七年九月
59	日清役黄海々戦	黄海	同 二十七年九月
60	廣島大本營軍務親裁	廣島縣	同 二十七年九月～同二十八年
61	廣島豫備病院行啓	廣島縣	同 二十八年三月
62	下關媾和談判	春帆樓	同 二十八年三月～四月
63	臺灣鎮定	臺北	同 二十八年八月
64	靖國神社行幸	九段	同 二十八年十二月
65	振天府	東京宮城内	同 三十年三月
66	日英同盟	貴族院	同 三十五年二月
67	赤十字社總會行啓	東京上野	同 三十五年十月
68	對露宣戰御前會議	表御座所	同 三十七年二月
69	日露役旅順開城	旅順	同 三十八年一月
70	日露役奉天戦	奉天	同 三十八年三月
71	日露役日本海々戦	日本海	同 三十八年五月
72	ポーツマス媾和談判	ポーツマス海軍工廠	同 三十八年八月～九月
73	凱旋觀艦式	横浜沖	同 三十八年十月
74	凱旋觀兵式	青山練兵場	同 三十九年四月
75	樺太國境劃定	樺太	同 三十九年六月～同四十年十月
76	觀菊會	赤坂離宮内	同 四十二年十一月
77	日韓合邦	朝鮮南大門	同 四十三年八月
78	東京帝國大學行幸	東京市	同 四十五年七月
79	不豫	二重橋前	同 四十五年七月
80	大葬	桃山	大正元年九月

一方、聖徳記念絵画館の造営局審議会は、本館の絵画展示室の壁面の大きさ（容積）を下記の様に定め、建物の設計も之によって決定することにした。そして、設計は、一般の懸賞図案募集の中から優秀な作品をとりあげる事とした。

畫題は漸次増加し、其初めに於ては大畫小畫と區別せられたるが、全部均等なる大いさとなり、高さ九尺、幅は第一及第三畫室にありては、三十六枚を八尺三寸八分とし、兩端壁に掲ぐるもの八枚を七尺とし、第二並に第四畫室にありては、八尺のもの二十四枚及七尺七寸のもの十二枚とせり。本館の設計も之によりて決定することゝ也り。⁹⁾

大正七年（1918年）、6月に定めた募集規定は、次のとおりであった。この懸賞図案募集に応募した中に、小林正紹、渡辺仁（工学士）、長谷部鋭吉（工学士）などの建築界の俊英がいた。当時、小林は29歳で無名の新人であったが、居なれば俊才を抑え、堂々一等賞を獲得したのである。当時の読売新聞は、¹⁰⁾「意外の光榮＝一等當選者＝小林正紹氏談」^{こばやしまさあき}として記事を書いている。この時、小林は新聞に次のコメントを語っている。

あの様な図案がよもや當選しやうとは思つて居ませんでした、あれは目下勤務中の臨時議院建築局に通ふ傍ら七月二十日から着手して應募締切の九月十六日に仕上げたもので、大体は内務省から發表された案に基いて羅馬ゴシック、サラセン等の様式を參酌したが、在來の様式に因らずに殆ど獨創的にやつたのです。尤も外觀に重きを置き内部の構造は成るべく簡単にし猶繪畫館は全体を單層とし其の階下に事務室、繪畫修理室、拜觀人休憩室を設け殊に採光に注意を拂ひ、葬場殿址の方は上部を塔にしましたのです¹¹⁾

謙虚な中にも、建築に対する熱意と才能を感じさせる内容になっている。小林は、明治42年の工手学校卒業生で、在学中から議院建築技師大熊喜邦（1877～1952）に学び、卒業後、同局技手となった。以前、大正博覽会に図案を出して銅牌を受けたり、東京府工芸品展覧会で褒状を受けたこともあり、梅檀は双葉より芳しの資質のタイプの人かと思われる。

小林正紹が建築史上、名を残すことになる懸賞図案募集の規定はどのようなものであったのか。下記にしるしてみる。

聖徳記念繪畫館及葬場殿址記念建造物設計圖案募集規定¹²⁾

一、明治神宮外苑内ニ建設スヘキ聖徳記念繪畫館及葬場殿址記念建造物ノ設計圖案ハ一般競技ニ依リ之ヲ募集ス

二、應募者ハ本規定竝ニ應募心得ニ從ヒテ設計圖案ヲ作製シ大正七年九月十六日正午マテニ明治神宮造營局ニ到達スル様之ヲ送附スヘシ

三、設計ノ要件左ノ如シ

い、葬場殿址記念建造物ハ殿址ヲ明示スルニ足ルヘキモノタルコト

ろ、聖徳記念繪畫館ノ位置ハ葬場殿址ノ前方ニ定ムルコト

は、兩建造物ハ連續スルモ分離スルモ可ナルコト

に、聖徳記念繪畫館ハ單層トシ下ニ地階ヲ設クルコト

は、繪畫室ヲ内法約四百坪トシ繪畫ヲ掲クヘキ壁面ノ延長ヲ約七百五十尺ト爲スコト

へ、兩建造物ハ耐震耐火的トシ其様式ハ健全ナル現代藝術ノ精華ヲ發揮スルモノタルヘキ
コト

と、葬場殿址記念建造物ノ工費ヲ約貳拾萬圓聖徳記念繪畫館ノ工費ヲ約壹百貳拾萬圓ト豫
定スルモ兩建造物ノ工費總額壹百四拾萬圓ノ範圍内ニ於テ相互ニ融通スルヲ得ルコト

四、提出スヘキ設計圖案左ノ如シ

い、敷地配置圖	一	縮尺六百分一
ろ、平面圖	各階	縮尺二百分一
は、立面圖	三	縮尺二百分一
に、斷面圖	二	縮尺二百分一
ほ、主要部詳細圖	一	縮尺二十分一
へ、透視圖	一	
と、説明書		

(五、～十三、は中略)

十四、審査員左ノ如シ

工學博士	古市公威
東京美術學校長	正木直彦
明治神宮造營局參與工學博士	塚本 靖
明治神宮造營局參與工學博士	伊東忠太
明治神宮造營局參事	荻野仲三郎
明治神宮造營局參事工學博士	佐野利器

当時の最高の建築家や美術知識家のグループによって審査された事が理解できる。正木直彦や伊東忠太および、佐野利器の名が見える。その結果、応募図案は156あったが堂々

一等に選ばれたのは、東京在住の小林正紹であった。二等は、有名な渡辺仁であった。当時の新聞には、下記の様に記されている。¹³⁾

壹等當選（賞金五千圓）

府下豊多摩郡千駄ヶ谷町字原宿

小林正紹

貳等當選一席（賞金三千圓）

本郷區駒込林町

渡邊 仁

また、小林正紹の図案は、意匠斬新で優秀であったが、そのまま実施にうつす事には少々無理なところもあり、工夫を要すると考えられたので、その図案を元に造営局建築係で、更に研究し、成案される事になった。その結果、設計され建築されたのが、現在聖徳記念絵画館である。

聖徳記念繪畫館定礎式 秋陽麗かなる十月十五日午前明治神宮外苑東隅葬場殿趾南側に於て明治天皇の御聖徳を記念すべき聖徳記念繪畫館の定礎式をいと嚴肅に執行された（中略）礎石の下に埋没すべき『明治天皇、昭憲皇太后の聖徳を永遠に記念せんがため明治神宮奉賛會の委囑に依り之れを建築す』の明治神宮造營局の記念板と『奉獻明治神宮外苑聖徳記念繪畫館』定礎の記念板（中略）を銘記したる銅版に金鍍金したる厚さ一分五厘、幅四寸、長さ五寸の兩記念板を夫々床次造營局副總裁阪谷奉賛會副會長に手渡しをすれば、更に小林技師は之を受取って埋納礎石を据えて床次副總裁は更に白木の小槌を以て礎石の上を三度渾身の力を注いで叩けば丁々の音も高らかに四邊に響き神嚴の氣充滿の裡に定礎行事全く終った¹⁴⁾

小林正紹の雄姿が上述の文章から垣間見られる。

(イ) 小林正紹について

小林正紹の人と業績については、すでに類洲 環氏の詳細な論考がある。¹⁵⁾

本論は、その論考を参考に論述するものである。

小林正紹は、1890年（明治23年）11月28日東京麹町区紀尾井町に生まれた。1909年（明治42年）、工手学校建築科（第39回生、夜間の学生）を卒業する。昼は、大蔵省臨時建築部に勤務した。大学から勤務先の大蔵省まで、小林は大熊喜邦（1877～1952）

の薫陶を受けた。代表作は、聖徳記念絵画館のほか、枢密院（現・皇宮警察本部）1922年、北海道拓殖銀行小樽支店（現・小樽ホテル）1923年これは矢橋賢吉と共同、堀商店社屋（現・東京都新橋2丁目）1932年等がある。

ところで、類洲 環氏の論考の中に興味深い下りがある。それは、小林正紹の畢生の大仕事は、国会議事堂ではないか、という。その説明に、長谷川堯著『日本の建築〔明治大正昭和〕4 議事堂への系譜』の一文を紹介している。以下、その部分を抜粋する。

この問題を解くためのひとつの鍵は、大正九年四月に起工され、大正十年九月に完成した「枢密院庁舎」のデザインにあるように思われる。一見すればそれとわかるように、枢密院の建物は、いわば後の国会議事堂の外観の「ミニチュア」といえるほどエクステリア・デザインが酷似している。枢密院の建物の翼をさらに横に引き伸ばして、中央玄関ホールの上の塔屋をさらに高く持ち上げれば、そのまま議事堂のデザインになる。特に車寄せとその列柱のあつかいや、外壁面の石積壁と開口のプロポーションなどは、現在の議事堂の外部デザインが、枢密院における「実験」の結果、決定された経緯をはっきり物語っているように思われる。（中略）現在の国会議事堂の外観の決定に、小林正紹というひとりの建築家のデザインが深いかわりを持っていたかもしれない、という推理も成り立ってくる。たしかに小林正紹の聖徳絵画館コンペの当選案と枢密院、国会議事堂の間の外観デザインには共通するものが私には感じられる。¹⁶⁾

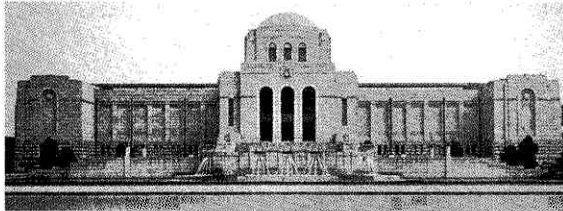
小林正紹という人物の建築の設計、デザインの才能に驚かされるのである。

次に、大正七年一月十日に発行された『聖徳記念繪畫館並葬場殿趾記念建造物競技設計圖集』（東京牛込・洪洋社）に、一等当選となった小林正紹の聖徳記念絵画館の詳細な図面が掲載されているので見てみよう。なお、後半の写真は、現在の聖徳記念絵画館の展示室の光景である。

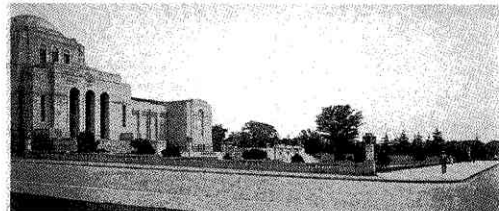
(口) 図面等〔『聖徳記念繪畫館並葬場殿趾記念建造物競技設計圖集』(洪洋社、1918.1.10)より抜粋。〕

1 竣工せる聖徳記念繪画館

正面全景

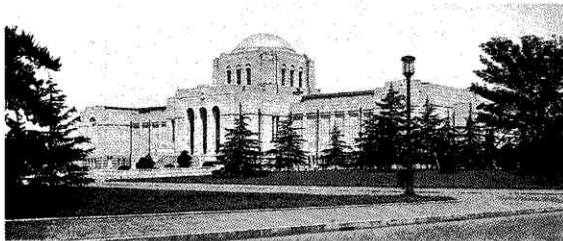


正面前の景観

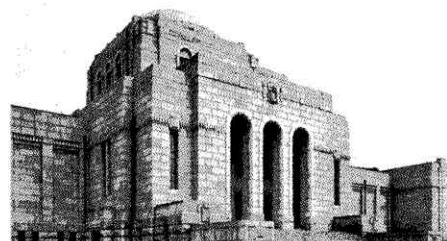


2 竣工せる聖徳記念繪画館

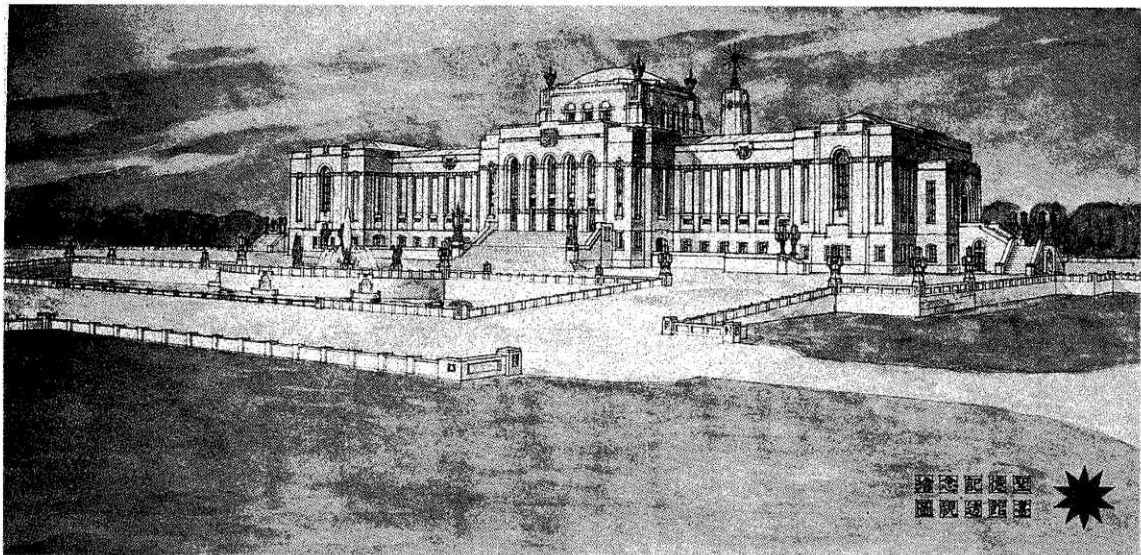
斜面全景



主要部詳細

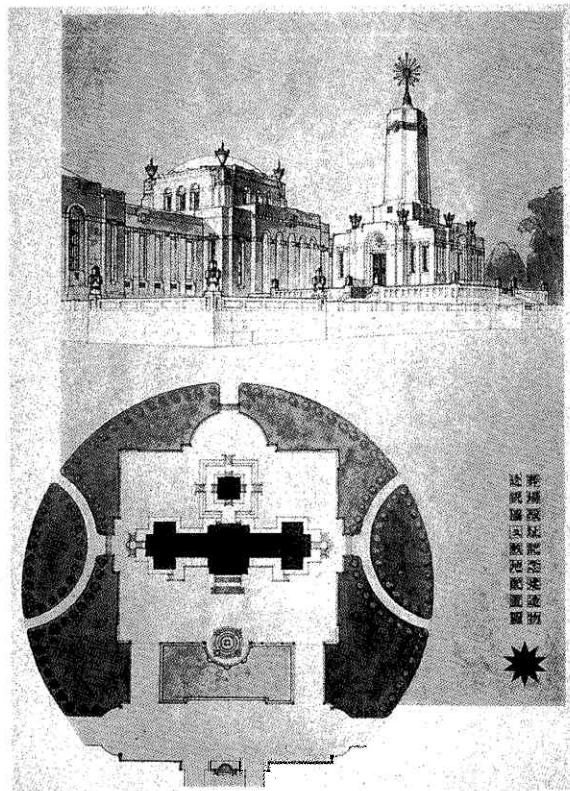


3 聖徳記念繪画館及葬場殿趾記念建造物 正面透視図

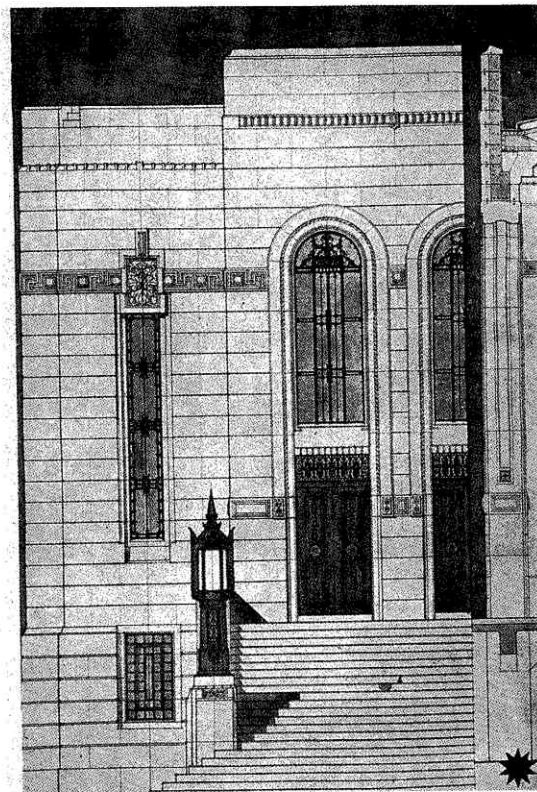


一等当選 小林正紹氏案

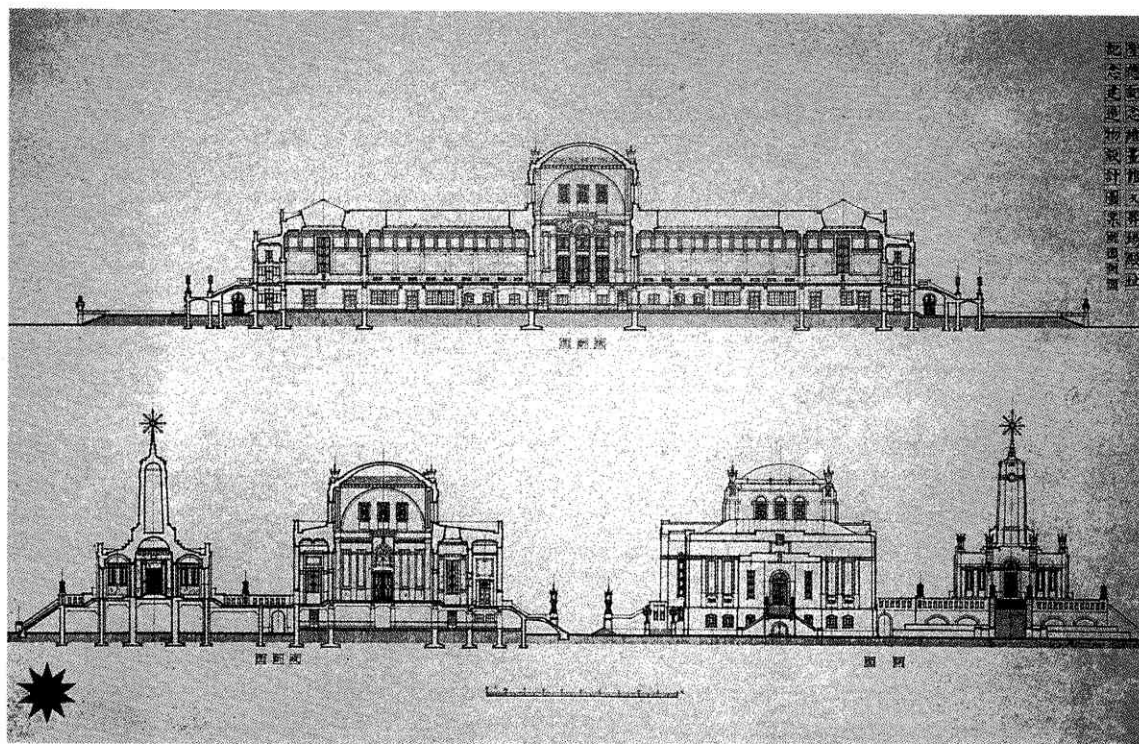
4 背面透視図及敷地配置図



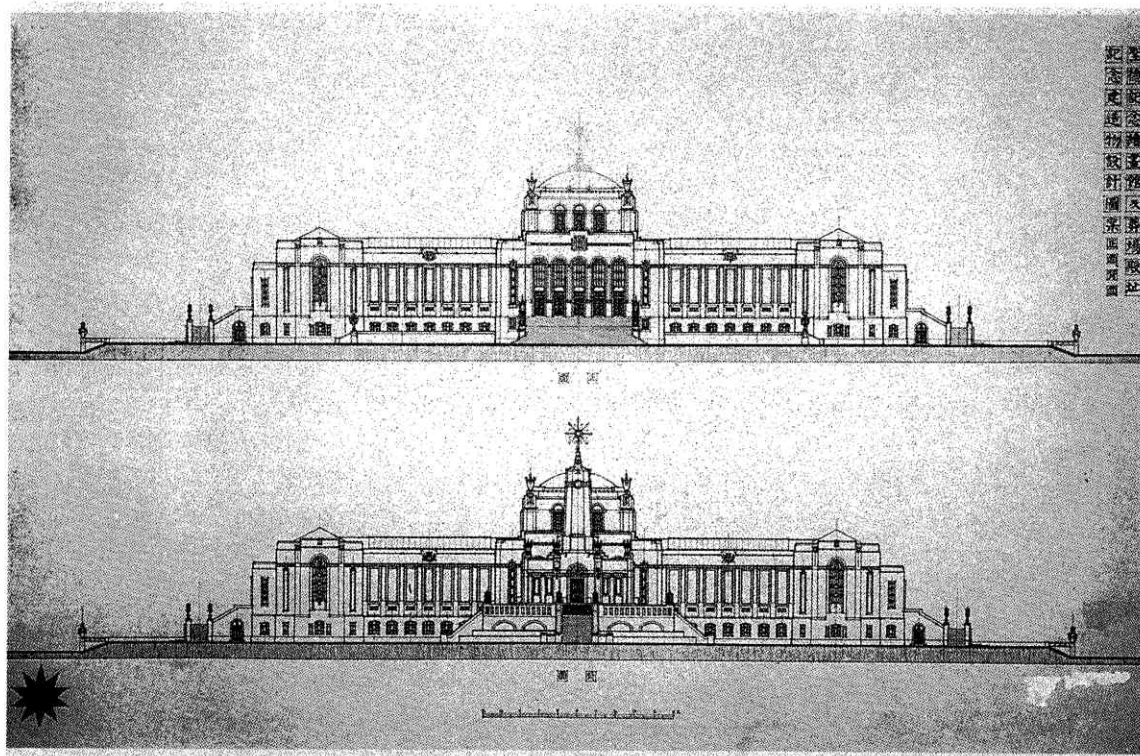
5 絵画館詳細図



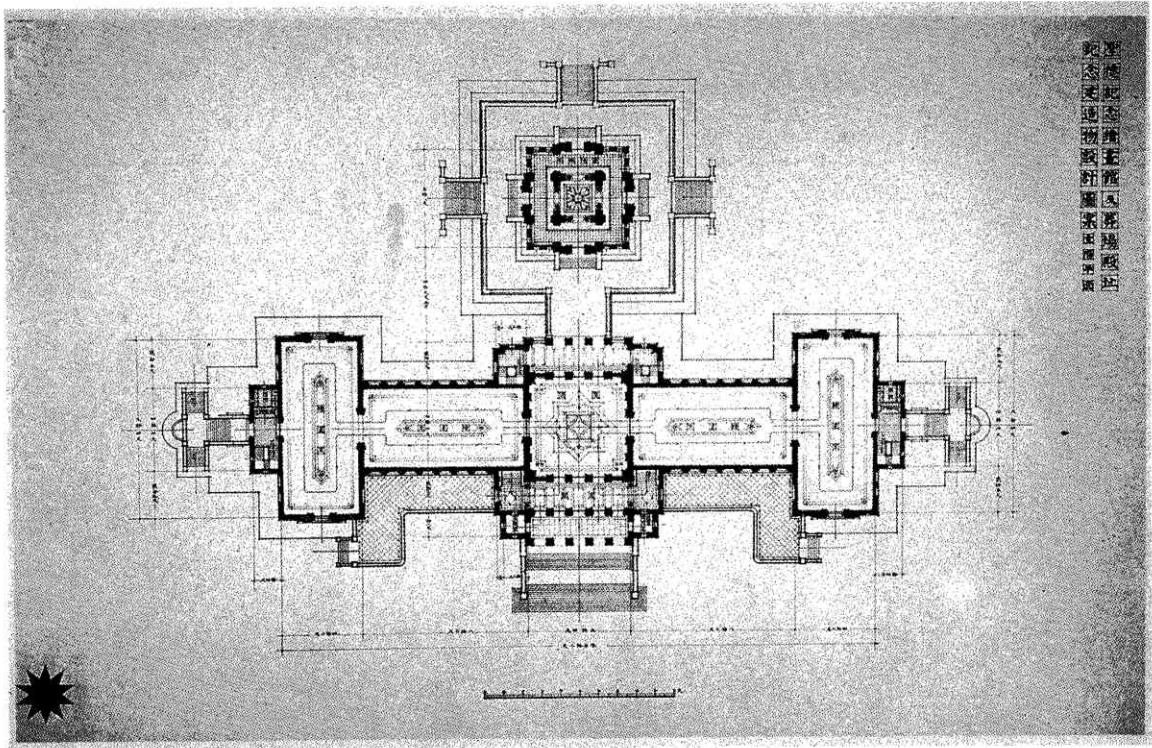
6 正面・背面立図



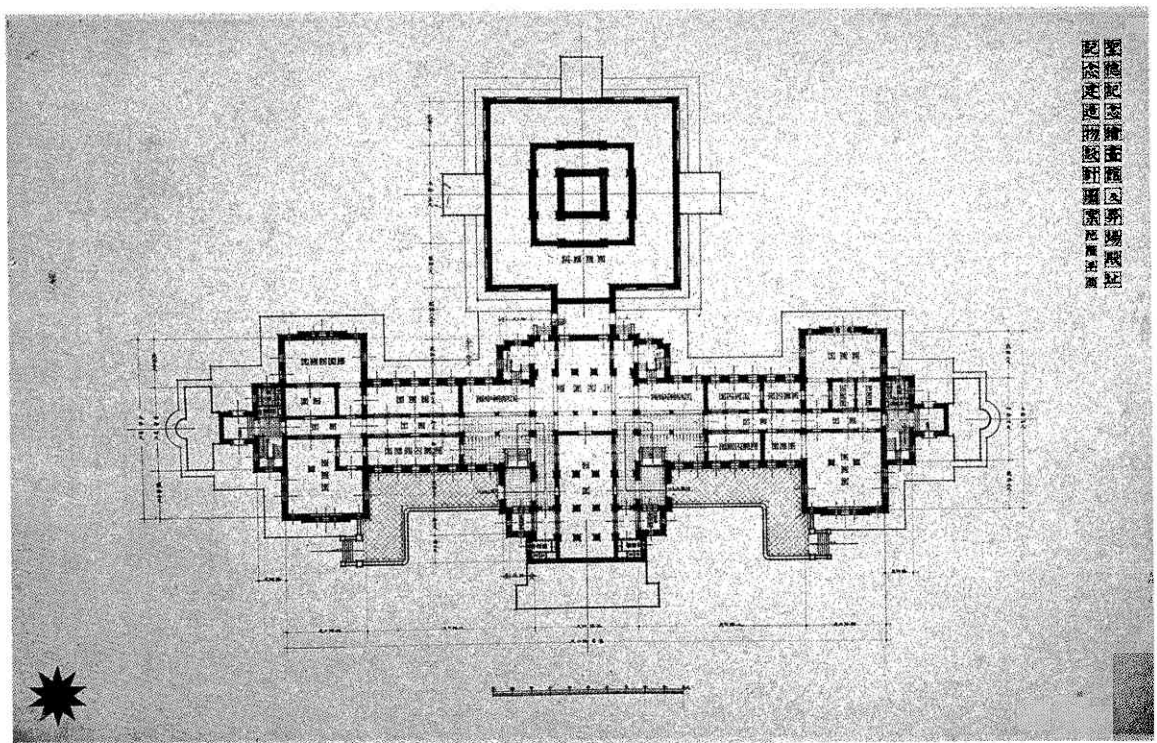
7 縦・横断面図及側面立図



8 主階平面図



9 地階平面図



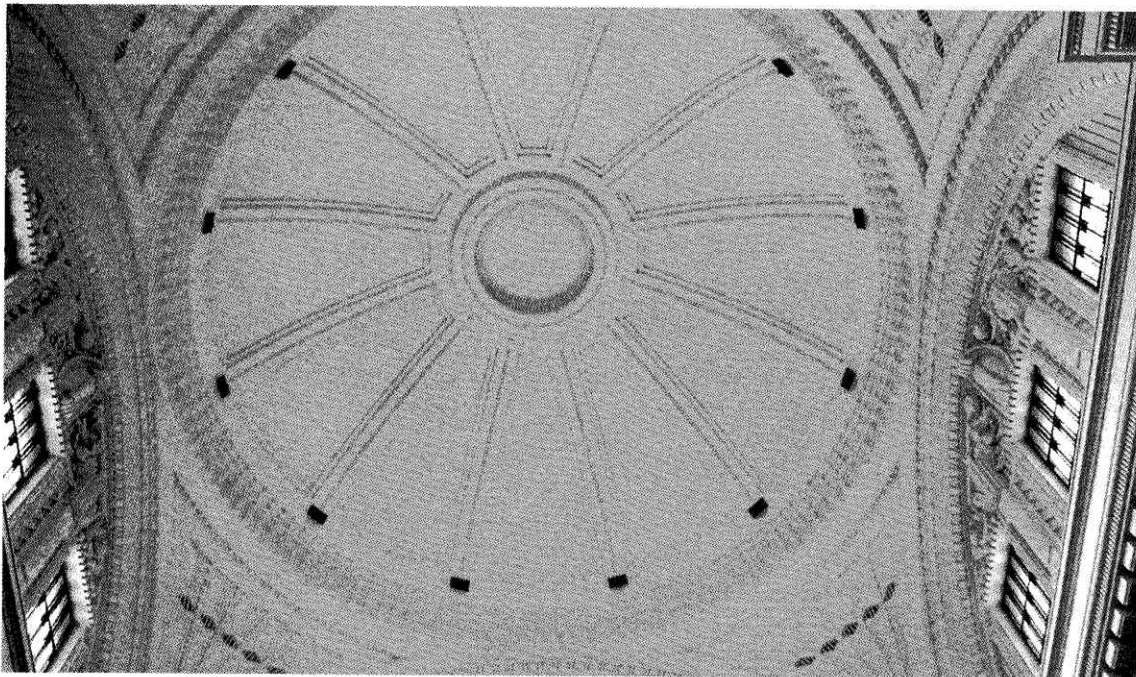
聖徳記念絵画館

正面



花崗岩の外壁から壮麗さが漂う。

1階天井のデザイン



鉄筋混凝土の内側に鋼材で骨組を作り、金網張モルタル塗を施し、さらにプラスター塗をする。石膏にて彫刻類を取り付けて全面に塗料をほどこす。

1 階中央大広間壁面



タイル張、大理石張の豪華な壁面、壮重さが漂う壁面のデザイン。

洋画室



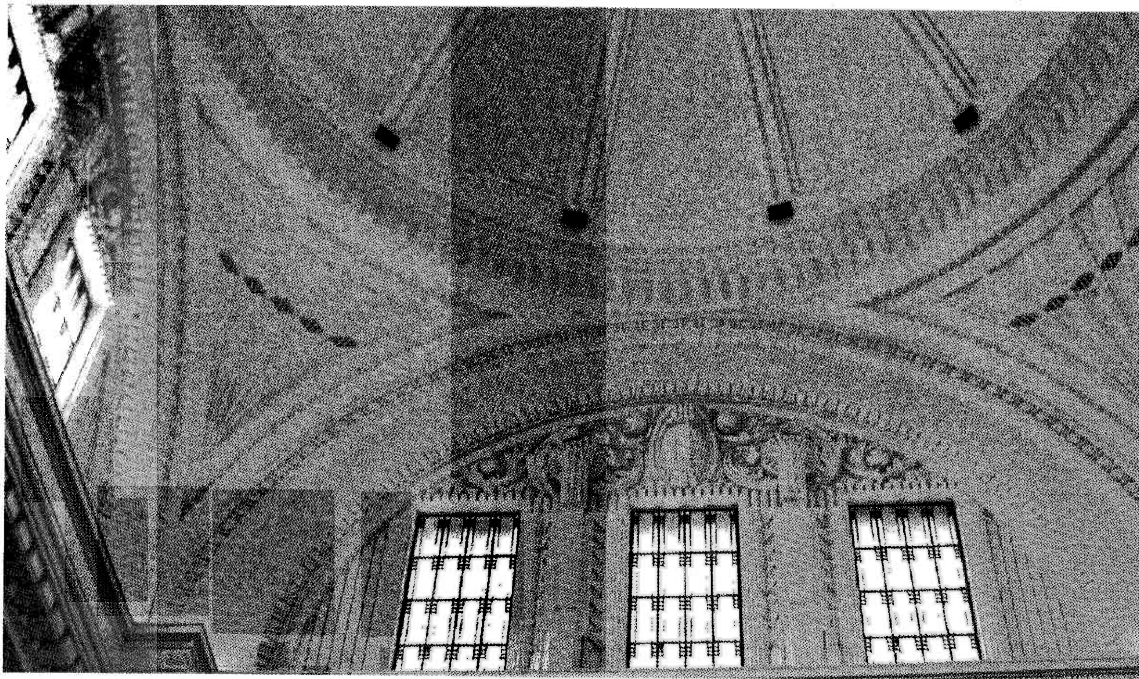
頂光室、天井は穹窿状。

日本画室



硝子天井から採光。

1階中央大広間天井部デザイン



大理石張の壁面、石膏彫刻が見える。壮麗なデザイン。

画題決定後、誰が、どの画題の壁画を担当するかが問題となった。これには、黒田清輝（1866～1924、東京美術学校西洋画科の指導者、白馬会結成、帝室技芸員、貴族院議員）の発議で、専門委員会を組織して対応することにした。そして、日本画の委員には、竹内栖鳳、山元春挙、川合玉堂、下村観山、小堀鞆音、横山大観を推薦し、西洋画の委員には、岡田三郎助、藤島武二、和田英作、長原孝太郎、中村不折、小林萬吾を推薦した。

大正12年（1923年）、9月15日、第1回専門委員会を開催し、絵画委員会規定と壁画調成委員会規定¹⁷⁾を設けて、それぞれの委員を任命した。第1回専門委員会の委員は次のとおりであった。

絵画委員氏名

子爵	藤波言忠
工學博士男爵	古市公威
	平山成信
子爵	黒田清輝
	正木直彦
文學博士	三上參次
文學博士	萩野由之
	水上浩躬

壁畫調成委員氏名

川合芳三郎（玉堂）
横山秀麿（大観）
小堀鞆音
竹内恒吉（栖鳳）
山元金右衛門（春舉）
結城貞松（素明）
鏑木健一（清方）
平福貞藏（百穂）
吉川三郎（靈華）

（以上 和畫部）

岡田三郎助
和田英作

中村不折

長原孝太郎

藤島武二

小林萬吾

(以上 洋畫部)

この年の9月1日に、関東大震災が勃発していたが、それでも、12月7日に第1回壁画調成委員会を開催した。そして、画面の寸法は画一主義を採用することになった。

画題番号第1番より第40番までを日本画、第41番から第80番までを西洋画と決定したのである。なお、絵画委員会規定と壁画調成委員会規程は次の様であった。¹⁸⁾

繪畫委員會規定

一、本會ニ繪畫委員會ヲ設ケ

二、本會ニ繪畫委員會ハ繪畫館委員會及選畫協議會ノ事業ヲ繼承シ既定ノ畫題ニ據リテ壁畫ヲ作成スルニ付必要ナル一切ノ事項ヲ議定ス

三、繪畫委員會ハ會長之ヲ召集ス

四、繪畫委員會議長ハ理事長之ニ當ル理事長差支アルトキハ委員中ヨリ之ニ代ル

附則

五、繪畫館委員會及選畫協議會ハ自今廢止ス

壁畫調成委員會規定

一、本會ニ壁畫調成委員會ヲ設ケ

二、壁畫調成委員會ハ壁畫ノ作成ニ關スル諸問題ニ付調査研究シ其決議ヲ繪畫委員會ニ報告ス

三、壁畫調成委員ハ和洋畫家中ヨリ推舉ス

四、壁畫調成委員會ハ和洋畫委員ノ合同審議ヲ以テ本則トス

但必要ニ依リ各別ニ審議スルコトアルベシ

五、壁畫調成委員會ノ召集、議事整理、決議報告ハ黒田正木兩繪畫委員ノ擔當トス

六、會長ハ必要ニ應ジテ臨時委員ヲ囑託シ壁畫調成委員會ニ出席シテ議事ニ參加セシムルコトアルベシ

Ⅲ. 聖徳記念絵画館の壁画（画題）の解題について

壁画の解題（解説）については、すでに明治神宮外苑発行の図録『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画 EXPLANATORY NOTES ON PICTURES IN MEMORIAL PICTURE GALLERY, MEIJI JINGU』に掲載されているので、ここでは、重要と考えられる6枚の作品について引用掲載することにした。また、『聖徳記念繪畫館壁畫集解説』の乾と坤の二冊中にみえる図の説明文を抜粋して最後に添付記載した。

13番 江戸開城談判（江戸城開け渡しの会談）

明治元年3月初め、大総督熾仁親王のひきいる官軍は江戸城にせまり総攻撃の態勢を整えましたが、旧幕臣もこれを迎え討つ準備を着々と進めておりました。幕軍の代表安房守勝義邦（海舟）はこれを憂え、戦いを起こさないよう努力、官軍の大総督参謀西郷吉之助（隆盛）と芝田町の鹿児島藩邸で会談しました。この結果、江戸城の開け渡しが決定し、江戸市民は戦災を免れることができました。¹⁹⁾

時 : 明治元年3月14日（1868年4月6日）

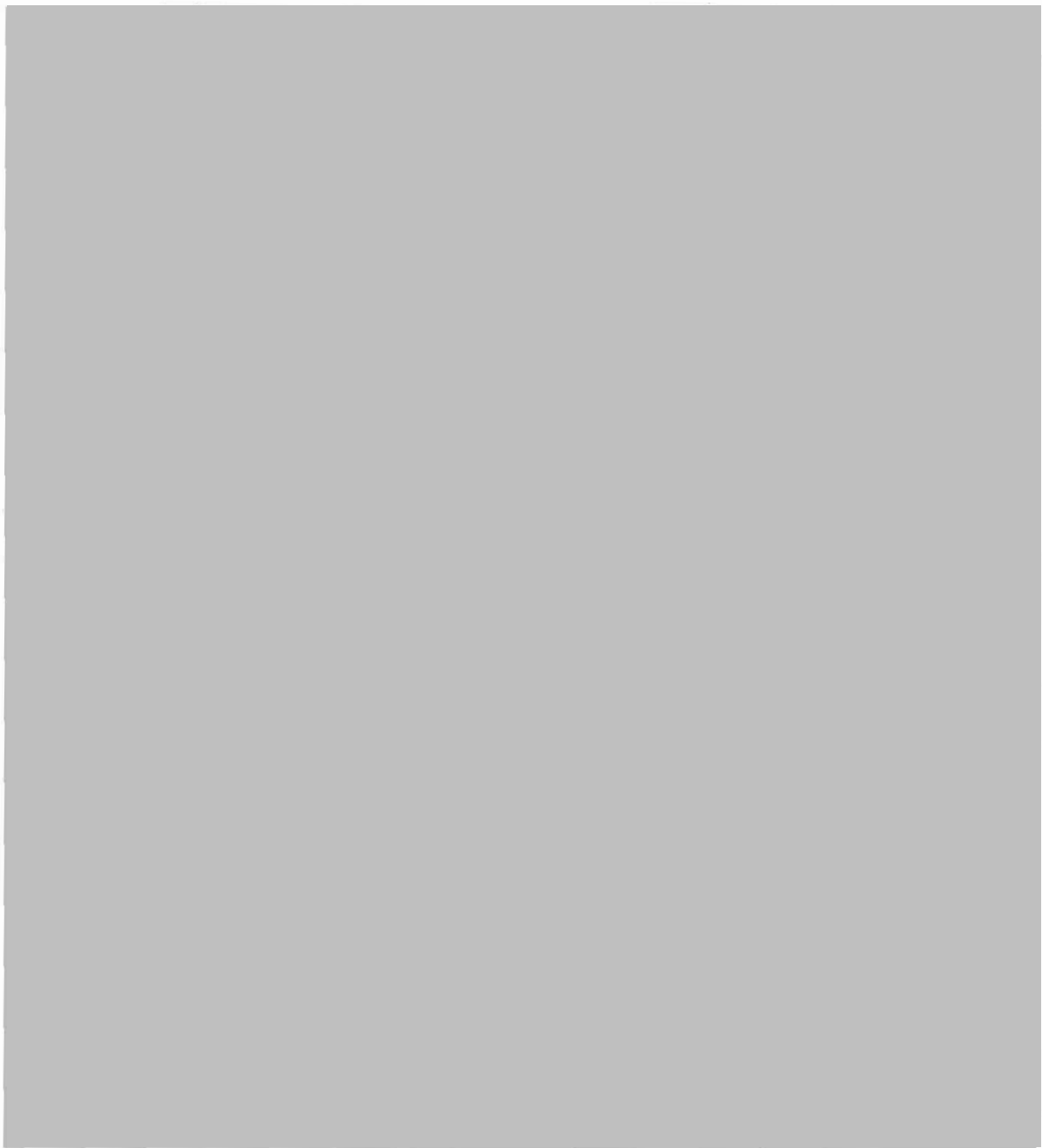
所 : 芝田町 鹿児島藩邸（東京）

奉納者：侯爵 西郷吉之助 伯爵 勝 精

画家 : 結城素明

圖ハ、明治元年三月十四日、芝田町ノ薩藩邸ニ於テ、大總督参謀西郷吉之助・勝義邦ト會見ノ光景ナリ。²⁰⁾

図版（番号は画題番号を示す）



13番 江戸開城談判⁽³³⁾（江戸城開け渡しの会談）
結城素明 作

聖徳記念絵画館蔵

40番 初雁の御歌

皇后は、天皇とともに和歌に秀でられ、ご在世中、三萬首に及ぶ和歌をお詠みになりました。
明治11年秋、天皇が北陸地方ご巡幸のおり、皇后は、初雁の飛ぶのをご覧になり、次の和歌をお詠みになり、はるか旅路にある天皇をおしのびになりました。²¹⁾

「はつかりを まつとはなしに この秋は こしちの空の ながめられつつ」

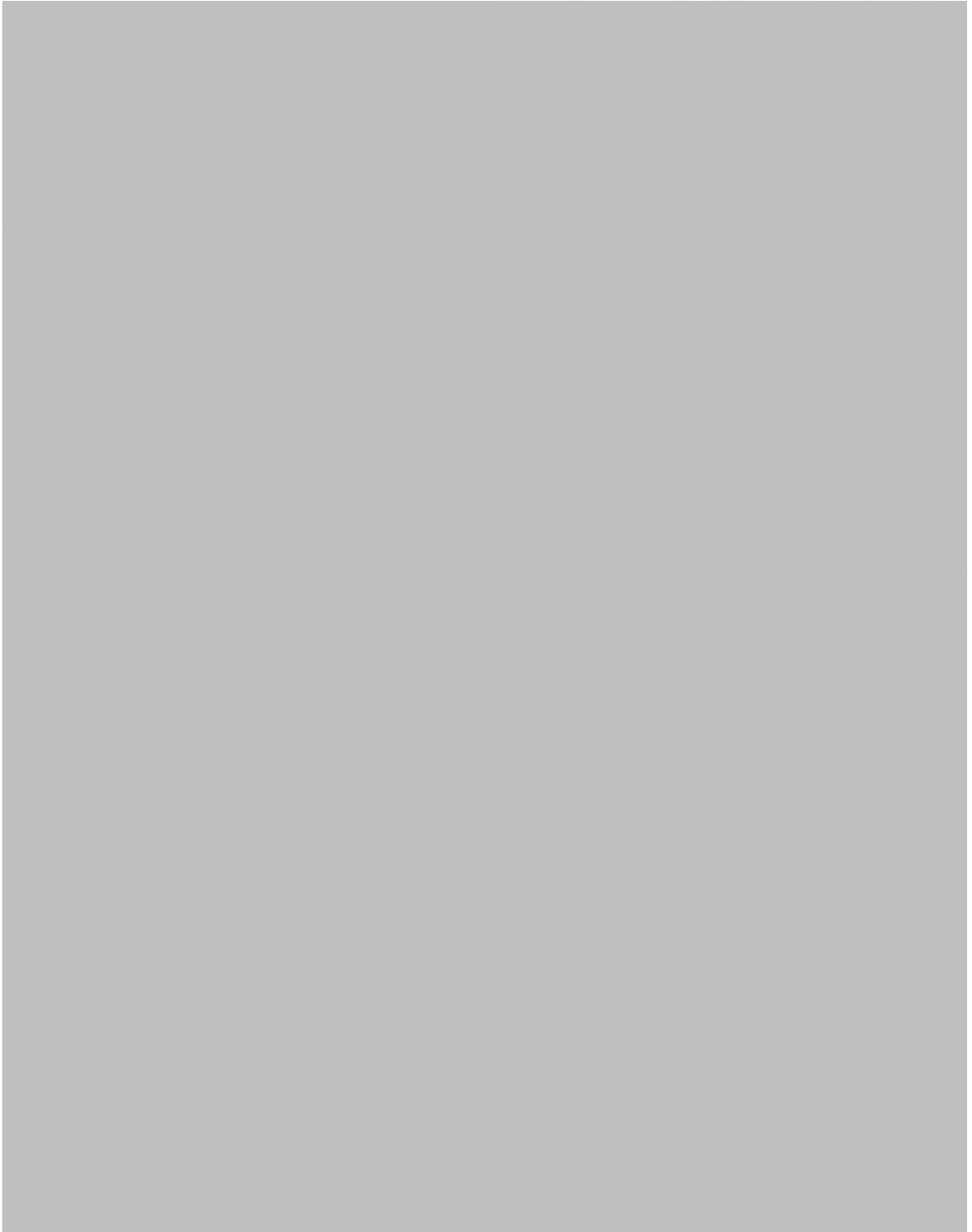
時 : 明治11年9月26日 (1878年)

所 : 赤坂假皇居

奉納者: 明治神宮奉賛会

画家 : 鏑木清方

圖ハ、明治十一年九月、皇后宮、近侍ノ女官ヲ隨ヘサセラレ、赤坂假皇居御苑ヲ逍遙
アラセラル、ノ光景ナリ。²²⁾



40番 初雁の御歌
鎬木清方 作

聖徳記念絵画館蔵

47番 岩倉邸行幸（岩倉具視を病床にお見舞）

岩倉具視は維新以来政府の要職にあつて諸政の刷新に尽力した功臣であります。明治16年7月19日、天皇は、病気のため重態となった岩倉具視を病床にお見舞いになりました。具視は家人に助けられて半身を起し、寝具の上に袴を置いて礼装に代え、合掌して天皇をお迎えしました。具視はその翌日の20日に死去しました。²³⁾

時 : 明治16年7月19日 (1883年)

所 : 馬場先門内

奉納者: 東京商業会議所

画家 : 北 蓮蔵

圖ハ、明治十六年七月十九日、車駕、右大臣岩倉具視ノ馬場先門内ノ第二幸シ、其ノ褥室ニ臨ミテ、親シク病患ヲ問ハセタマフノ光景ナリ。²⁴⁾



47番 岩倉邸行幸（岩倉具視を病床にお見舞）
北 蓮蔵 作

聖徳記念絵画館蔵

51番 憲法発布式

明治22年2月11日（紀元節の日）に新しく竣工した皇居正殿で憲法発布式が行われました。
この日、天皇は、皇族・大臣以下を随之宮中三殿（賢所、皇霊殿、神殿）を拝し憲法発布・
皇室典範制定をご奉告のあと憲法発布式にお出ましになり、お言葉をたまわり、憲法を首相
黒田清隆にお渡しになりました。この式典には皇后も御列席になりました。²⁵⁾

時 : 明治22年2月11日 (1889年)

所 : 宮城正殿

奉納者: 公爵 島津忠重

画家 : 和田英作

圖ハ、明治二十二年二月十一日、天皇、正殿ニ出御、憲法発布式ヲ行ハセラレ、憲法
ヲ内閣總理大臣黒田清隆ニ授ケ給フノ光景ナリ。²⁶⁾



51番 憲法発布式
和山英作 筆

聖徳記念絵画館蔵

71番 日露役日本海海戦（日本海軍の大勝利）

明治38年5月27日、連合艦隊司令長官東郷平八郎の指揮する日本海軍は、ロシアのバルチック艦隊を日本海に迎えてこれを撃砕し、戦史に輝く大勝利を収めました。このとき、旗艦三笠のマストに「皇国の興廃この一戦にあり各員一層奮励努力せよ」の信号旗が掲げられたことは有名な話です。²⁷⁾

時 　　：明治38年5月27日（1905年）

所 　　：日本海

奉納者：日本郵船株式会社

画家 　：中村不折

圖ハ、明治三十八年五月二十七日、我ガ聯合艦隊旗艦三笠、諸艦ヲ率キテ、敵艦隊ト日本海ニ砲火ヲ交フルノ光景ナリ。²⁸⁾



71番 日露役日本海海戦（日本海軍の大勝利）
中村不折 作

聖徳記念絵画館蔵

80番 大葬（御葬儀）

天皇の御葬儀は、大正元年（1912年）9月13日、東京青山葬場殿（現在の絵画館北側）で行われ、ご追号を「明治天皇」と申し上げることになりました。御陵は、御遺志により京都市南郊の伏見桃山と定められ、翌14日、御霊柩を京都にご移送、霧雨の降る中で御埋葬の儀が行われました。御陵名は、伏見桃山陵と申します。²⁹⁾

時　　：大正元年9月14日（1912年）

所　　：伏見桃山（京都）

奉納者：明治神宮奉賛会

画家　：和田三造

圖ハ、大正元年九月十四日夕、細雨霏々タル間ヲ、靈柩山陵ニ向ハセラルルノ光景ナリ。³⁰⁾



80番 大葬（御葬儀）
和田三造 作

聖徳記念絵画館蔵

終章

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』は、明治に青春時代をおくった正岡子規、秋山好古、秋山真之を中心に、日清、日露の戦いを通した日本の世相が描かれた名作である。第6部の「雨の坂」の章に、連合艦隊司令長官東郷平八郎の参謀で且つ文章家の秋山真之の書いた日本海海戦の「戦闘詳報」冒頭文が引用されている。

天佑ト神助^ト由リ、我カ聯合艦隊ハ五月二十七八日、敵ノ第二、第三聯合艦隊ト日本海ニ戦ヒテ、遂ニ殆^{ほとん}ト之ヲ撃滅スルコトヲ得タリ³¹⁾

明治38年、(1905年) 5月27日、昼すぎ、日本海海戦がはじまった。この戦で圧倒的勝利を収めた東郷が横浜に凱旋した時、旗艦三笠の司令長官室に様々な国の新聞記者が来て質問し勝利の理由を聞こうとした。その答えはいつも「陛下が、ロシヤの艦隊を日本海に³²⁾入れてはならぬと御命令遊ばされたからだ。」と言うのみであったという。

このような強い影響力を有した明治天皇とは一体どういう存在の御方で、どの様な御事績をつまれたのか誰でも大いに興味をもつであろう。

現在、代々木にある聖徳記念絵画館の壁画にその総ての解答が描かれている。真に、天祐と神助の具現した存在であったのであらうと思われる。困惑する現代社会に生きる我々にとって、この聖徳記念絵画館の存在は、本当に意義ある存在と思われるのである。

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは 人の心のまことなりけり (明治天皇御製³⁴⁾)
みがかずば玉の光はいでざらむ 人のこころもかくあるらし (昭憲皇太后御歌)

注と参考文献

- 1) 『新訂国語図説』 井筒雅風・内田満・樺島忠夫共編、p. 227、京都書房、1994. 1. 10
中村草田男（1901～1983）俳人、中国福建省に生まれ、東大文学部卒業。水原秋桜子に師事、「ホトトギス」同人となる。正岡子規の写生を受け継いだ。

『日本経済新聞』春秋欄、「降る雪や明治は遠くなりけり」は、中村草田男が明治の末年に通っていた母校の小学校を、二十年ぶりに訪れた時の句という。2005年（平成17年）水曜日朝刊新聞記事。
- 2) 『聖徳記念繪畫館壁畫集 附録』、「明治神宮御造營ノ由來」 p. 3～p. 4、明治神宮奉賛會發行、1932. 11. 3
- 3) 『聖徳記念繪畫館壁畫集 附録』、「明治神宮御造營ノ由來」 p. 4～p. 5、明治神宮奉賛會發行、1932. 11. 3
- 4) 『聖徳記念繪畫館壁畫集 附録』、「明治神宮御造營ノ由來」 p. 6、明治神宮奉賛會發行、1932. 11. 3
- 5) 『明治神宮外苑志』 p. 460～p. 462、「第九篇 繪畫 第一章 畫題の選定」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
- 6) 『明治神宮外苑志』 p. 462、「第九篇 繪畫 第一章 畫題の選定」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
- 7) 『明治神宮外苑志』 p. 468～p. 469、「第九篇 繪畫 第一章 畫題の選定」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
- 8) 『明治神宮外苑志』 p. 470～p. 485、「第九篇 繪畫 第一章 畫題の選定」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』 p. 8～p. 169、明治神宮外苑、1992. 3. 1
- 9) 『明治神宮外苑志』 p. 132、「第三篇 建築 第二章 聖徳記念繪畫館」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
- 10) 『読売新聞』1918年（大正7年）9月28日（土）朝刊5面 小林正紹は、正しくは、こばやし・まさつぐと読むが、紙面には、まさあきと読みが書かれている。
- 11) 『読売新聞』1918年（大正7年）9月28日（土）朝刊5面
- 12) 『明治神宮外苑志』 p. 132～p. 135、「第三篇 建築 第二章 聖徳記念繪畫館」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937. 8. 20
- 13) 『読売新聞』1918年（大正7年）9月28日（土）朝刊5面
- 14) 『建築雑誌』35（421）、「聖徳記念繪畫館定礎式」 p. 671～p. 672、1921. 1

- 15) 『NICHE 2004 Vol.28』工学院大学建築系学科同窓会編集・発行、類洲 環執筆「明治神宮外苑のシンボル“絵画館”を設計した小林正紹 輝かしき先輩たち……⑥」p.54～p.59、2004.11.10
執筆者類洲 環氏は、本名を伊藤真人と^{まこと}言い、工学院大学の卒業生である。
- 16) 『日本の建築「明治大正昭和」4 議事堂への系譜』長谷川堯著、p.181～p.182、「議事堂のデザイナー」、三省堂、1981.4.10
- 17) 『明治神宮外苑志』p.504～p.507、「第九篇 繪畫 第三章 製作」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937.8.20
- 18) 『明治神宮外苑志』p.505～p.507、「第一回壁畫調成委員會を開き、畫面の寸法は劃一主義を採ることとし、縦九尺、横は畫廊の平均寸尺に應じて八尺三寸三分、八尺、七尺六寸六分及七尺の四種に分ち、第一號より第四十號までを日本畫、第四十一號より第八十號までを西洋畫とせり。」と記されている。「第九篇 繪畫 第三章 製作」、明治神宮奉賛會、凸版印刷株式會社、1937.8.20
- 19) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.32～p.33、⑬、明治神宮外苑、1992.3.1
『氷川清話』（勝海舟全集21）、勝海舟全集刊行会代表 江藤淳、p.53～p.55、講談社、1973.10.28
- 20) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説（坤）』13、明治神宮奉賛會、1936.10.1
- 21) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.86～p.87、④〇、明治神宮外苑、1992.3.1
- 22) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説（乾）』40、明治神宮奉賛會、1932.11.3
- 23) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.100～p.101、④7、明治神宮外苑、1992.3.1
- 24) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説（乾）』47、明治神宮奉賛會、1932.11.3
- 25) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.108～p.109、⑤①、明治神宮外苑、1992.3.1
『明治人の力量』（日本の歴史第21巻）、佐々木隆、p.24～p.44、講談社、2002.8.10
- 26) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説』（坤）51、明治神宮奉賛會、1936.10.1
『図説日本の歴史14 近代国家の展開』著者代表小西四郎、p.213～p.250、集英社、1976.4.10
- 27) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.148～p.149、⑦①、明治神宮外苑、1992.3.1
『日露海戦記』（全）海軍勳功表彰會編纂、佐世保海軍勳功表彰會、1906.7.23
- 28) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説（乾）』71、明治神宮奉賛會、1932.11.3
- 29) 『明治神宮 聖徳記念絵画館壁画』p.166～p.167、⑧〇、明治神宮外苑、1992.3.1
- 30) 『聖徳記念繪畫館 壁畫集解説（坤）』80、明治神宮奉賛會、1936.10.1
- 31) 『坂の上の雲 三』司馬遼太郎全集26、p.495、文藝春秋、1981.12.1

『日本大百科全書 1』 p. 188、^{あきやまさねゆき}「秋山真之（1868-1918）海軍軍人。松山藩士族の出身。兄^{よしふる}好古は陸軍大將。1890年（明治23）海軍兵学校卒業。97年アメリカ留学、99年イギリス駐在、1900年（明治33）に帰国、常備艦隊参謀として、黄海海戦、日本海海戦などの作戦を担当した。（中略）海軍きっての戦略家といわれ、日本海海戦の「丁字戦法」などの発案者とされている。また名文家でもあり、彼の起草した日露戦争中の大本営への報告文は広く知られている。正岡子規は同郷の友人。〈藤原 彰〉」、小学館、1984. 11. 20

32) 『東郷元帥一代の記念寫眞帖』 p. 43、主婦之友社、1934. 7. 1

『「明治」という国家 [下]』司馬遼太郎、日本放送出版協会、1994. 1. 30『日本大百科全書16』 p. 679
^{とうごうへいはちろう}「東郷平八郎（1847-1934）明治・大正期の海軍軍人。弘化4年12月22日生まれ。薩摩藩出身。初め仲五郎と称し、元服して平八郎と称す。薩英戦争に参加後、1866年（慶応2）薩摩藩の海軍に入る。戊辰戦争に薩摩藩の軍艦「春日」に仕官として乗り組み、阿波沖で幕府艦「開陽」と戦う。この海戦は日本における欧式軍艦間の交戦の嚆矢になった。維新後の新海軍においては、71年（明治4）4月から78年5月までイギリス留学。79年12月海軍少佐、94年6月「浪速」艦長になり日清戦争に出役。98年5月に中将、1903年（明治36）12月連合艦隊司令長官になり、翌年6月に大將。日露戦争の日本海海戦（1905年5月27日）で、ロシアのバルチック艦隊を完破し、一躍世界的名声を得、「東洋のネルソン」と称された。13年（大正2）4月元帥、翌年4月東宮御学問所総裁になり、昭和9年5月30日の死去の直前に侯爵となり、国葬で葬られた。〈遠藤芳信〉

33) 『勇のこと』津本 陽、p. 175、講談社、1998. 7. 16

『南洲翁遺訓』より

万民の上に位する者、己を慎み、品行を正しくし、^{きようしや いまし}驕者を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して、人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思う様ならでは、政令は行われ難し。然るに草創の始めに立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、^{びしょう}美妾を抱え、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今となりては戊辰の義戦も、偏に私を営みたる姿になり行き、天下に対し、戦死者に対して面白なきぞとて、頻りに涙を催されける。

34) 『明治神宮外苑』パンフレット

※本論文執筆にさいし、明治神宮外苑聖徳記念繪畫館 事務長 田村 行先生の助言、資料提供の協力が
あり感謝の意を表します。また、ドキュメンタリスト中島理壽氏の資料紹介、及び、類洲 環氏の資料
提供および助言をいただいた事に厚く御礼申し上げます。また、大阪大学図書館、関西学院大学図書館、
大阪樟蔭女子大学図書館、大手前大学図書館の司書のご協力と日本美術家連盟事務局の池谷慎一郎氏の
著作権に関してのご協力を感謝いたします。

キーワード：聖徳記念絵画館，明治神宮，明治天皇，画題

Keywords：Meiji Memorial Picture Gallery, the Meiji Shrine, the Emperor Meiji, the subject of a painting